

降誕節第8主日礼拝 説教 「信仰なき我を救い給え」 要旨

日本キリスト教団藤沢教会 2021年2月14日

マタイによる福音書 14章 22～36節

聖書の御言葉に聞いている時、その言葉をいかに受け止めればいいのかと悩むことがあります。皆さんはいかがでしょうか。御言葉がすっと腹に落ちることもあれば、口にするのも憚れることもあるからです。そこで、早速今日のみ言葉に聞いていきたいのですが、今日の御言葉の最後では、「船の中にいた人たちは、『本当に、あなたは神の子です』と言ってイエスを拝んだ」と記されています。それは、これこそが、私たちが今日ここで聞くべきものでもあるからです。なぜなら、主イエスに向かって、弟子たちが「本当に」、「あなたは神の子です」とこう叫んでいるように、弟子としての主イエスに対するこの告白こそが、私たちの信仰を信仰たらしめているからです。では、この告白がどうして大事なのか。もちろん、それは、私たちの信仰が主イエスを神の子と告白するところから始まるからです。では、それはどういうところから始まるのでしょうか。それは、主イエスに向かって、彼らをして「本当に」と言わしめているように、それは一言で言えば、主イエスのなさることへの驚きです。そして、ここでは、それを意図して主イエスは弟子たちを導こうとしているのです。

ただ、私は、ここが大事な点であると思うのですが、その主イエスのご命令に従うことに、弟子たちは端から納得してはいなかったということです。つまり、何でこんなことをしなければならぬのかとのモヤモヤした気持ちを抱えたまま、弟子たちは沖へと船を漕ぎ出していったということです。そして、時間が経つにつれ、そのモヤモヤはどんどん大きくなっていった、それは新たな困難に加えて、弟子たちには、対岸に向かうその目的がまったく知らされてはいなかったからです。つまり、「何のために俺たちこんなことをしなければならぬんだ」と、弟

子たちがそう思ったということです。ただ、それも当然、弟子たちを驚かせることが、夜に船を漕ぎ出させたその目的でもあったからです。ただし、人を驚かせ、怖がらせるのがここでの目的ではありません。湖の上を歩く主イエスを見つけた弟子たちが「幽霊だ」と脅え、叫び声を上げているように、イエス様のお言葉に従う者であっても、不安に脅え、恐怖に身がすくむことはあるのです。けれども、その弟子たちに向かって、主イエスが「安心しなさい。私だ。恐れることはない」と直ぐにこう返事をしている、このことはつまり、その私たちと共にくださっているのが主イエスであるということです。従って、驚きとはすなわち、いないはずのイエス様が共にいてくださっている、思いも寄らないときにイエス様は来てくださる、この共にいますイエス様に対する驚き、つまり、この経験が弟子たちをして、また私たちをして、イエス様を主と告白させるということです。ですから、イエス様がそういう方であることを知るためにも、私たちは後先を考えずにイエス様のお言葉に従って、この驚きを体験する必要があります。

しかし、私たちの多くにとっては、イエス様がいかなる方であるかはもうすではっきりと分かっていることです。ですから、暗闇の中に私たちが進み出て、そこでイエス様と出会うということは、それはそれで驚きではありますが、それ自体が暗闇に進み出る上での目的とはならないのでしょうか。なぜなら、イエス様が私たちから離れないということは自明なことでもあるからです。それゆえ、沖に漕ぎ出し、その私たちが願うことは、その使命を果たす上での必要をイエス様に満たしていただくということです。つまり、この時のペトロと同じことを私たちが求めるということですが、それは、私たちがイエス様のお言葉に従う上で必

要なことだからです。そして、興味深いのは、私たちがそう願うことに、イエス様はケチケチしたことを仰らないということです。ですから、私たちは、持つておられるものをくださいと、イエス様にどんどん手を出せばいいわけで、そういう点で、私たちはイエス様に物怖じしてはならないということです。

そこで、それを手にしたペトロはどうしたのか、恐る恐る水の上に立ち、そして、御言葉が「ペトロは船から下りて水の上を歩き、イエスの方へ進んだ」と語るように、ペトロは願い通りにイエス様と同じ力を手にすることができたのです。ところが、ちょっとした気の緩みからか、気が散り、ふと我に返り、自分の置かれている状況に怖じ気づいてしまったのです。集中し、気が張っているときには何でもないことでも、ふとした気の緩みから恐くなってしまふことが人にはあるからです。山登りにのめり込んでいた若い頃、そういうことが何度かありましたが、そういうときに思わず声を出してしまい、仲間から手を差し伸べられたということがありました。ですから、「主よ、助けてください。」とペトロが叫び、そして、イエス様がすかさずそのペトロに手を差し出したというのは、そのときのことを思い出すのですが、それゆえにまた、その直後にイエス様が語った「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」とのこの言葉が私の胸を打つのです。

「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」とのこの言葉は、主イエスが何度も弟子たちに語った言葉です。そこで、皆さんはこの言葉をどのように受け止められるのでしょうか。ここでは、ペトロに向けられた主イエスのネガティブな気持ちが言い表されているのは間違いありません。ですから、だらしのない弟子への苛立ちが、イエス様をしてそのように言わしめたとも言えるのでしょうか。けれども、主イエスのこの言葉は、脅しのための言葉でもなければ、突き放し、関係性を終わらせるための冷たい言葉でもありません。なぜなら、そもそものところで考えれば、

この「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」という一言は、それ自体がおかしな言い回しでもあるからです。つまり、文脈を理解せずにこの言葉だけを取り出すなら、それ自体意味をなしていないということです。なぜなら、信仰が未熟で薄っぺらいものであるからこそ、ペトロはイエス様のことを、イエス様のその力を疑ってしまったわけです。そして、このことは、ペトロが沈みかけ、ヒーと情けない声を出していることから分かります。つまり、この主イエスの「信仰薄い者よ」とのペトロへの呼びかけと、それに伴う「なぜ疑ったのか」との問いかけは、そもそものところで意味をなしていないということです。祈ることを知らない者にどうして祈れないのだと強く叱ったところで、直ぐに祈れるようにはならないからです。

しかし、主イエスは、弟子たちに対しそれを繰り返して語っているのです。従って、ここにイエス様の特別な思いが込められているのは間違いありません。そして、それは、沈みかけるペトロに、主イエスがすかさず手を差し伸べていることから分かります。それだけに、私たちは、どうしても主イエスのこの不思議な言葉の意味を問わずにはいられないのです。そこで、私たちは、主イエスのこのお言葉を見方を変えて次のように考えるのでしょうか。それは、主イエスがペトロに向かって「どうしてお前は信仰篤くすることができないのか、何でもっと強く私のことを信じることができないのか」と、イエス様がその弱い信仰を責めていると考えるのです。ただ、強いか弱い、立派か立派でないかとの問いの立て方から一体どんな結論が得られるのでしょうか。そもそものところで言うなら、強い信仰とはどういうものなのでしょうか。また、弱い信仰というのは、どういうものなのでしょうか。そして、それを決めるのは一体誰なのでしょうか。そこで、はっきり言えることは、それを決めるのは私たちではないということです。

ただ、私たちの信仰が、だから、いい加減で、適当で、ただだらしがないだけの、自分にとっての都合いいだけのものであっていいということではありません。私たちの信仰は、豊かなものであって、決して貧しいものではないからです。そして、それは、ここでもはっきりと語られていることです。真面目すぎて他を寄せ付けない、そういう近寄り難さを主イエスは私たちに求めるのではなく、沈みかけたペトロに主イエスがすかさず手を差し伸べているように、要領が悪く、おっちょこちょいで、直ぐ調子に乗る、でも、気のいい、そういう未熟な者を常に気にかけているのが主イエスというお方であるからです。つまり、そういう豊かさ、鷹揚さを持っているのが私たちの信仰であるということです。ところが、そのイエス様が無理を承知の上で、ペトロに向かって「信仰薄い者よ、なぜ疑うのか」と仰っている、それは、そのままでいいということではないからです。では、イエス様はペトロ初め弟子たちのことをどうしたかったのでしょうか。その答えが「本当に、あなたは神の子です」との弟子たちのこの言葉の中に言い表されていることなのです。

イエス様が神様の独り子であるとするこの告白は、「本当に」と驚きをもってなされるものです。そして、この驚きもたらされるのは、私たちがイエス様のことを正しく知ったからでもあります、それは、同時に、自分は何も知り得ない、分からない、そのことが了解されて初めて少しずつ分かっていくことなのです。ですから、そもそものところで言えば、信仰告白というものは、分かっているから口にするのではなく、分かっているからこそ口にできるものであるということです。そして、それは、ここでの出来事その直前で、弟子たちが何を経験したかを見れば明らかです。弟子たちはこの直前で五千人がすべて満ち足りたという奇蹟を経験しているのです。そして、その直後に主イエスは、弟子たちに向かって対岸に渡るように命じたわけです。

しかも、夜に、です。そして、このことはまた、主に直接命じられたわけですから、安全は初めから保証されていたということです。けれども、それにも関わらず、弟子たちは脅え、怖じ気づいてしまった。ただ、それも無理のないことです。自然の猛威に抗うことなど、人間にはできることではないからです。ところが、主イエスが共にあることが分かったら、ヒーヒー言っていたことなどまったく気にする様子もなく、今度は、主イエスにおねだりをするのです。そして、人間にはこういう調子の良さがあるのですが、ところが、イエス様は小言すら言わずにこの調子良さに応じているのです。このことはつまり、私たちの信仰においては、反省は、第一義的な問題ではないということです。けれども、それゆえにまた、調子に乗りすぎてしまう、そして、それが慢心に繋がり、慢心は気の緩みへとつながり、その足下はたちまちの中に怪しいことになってしまう。そして、発せられた言葉が先ほどの「信仰の薄い者よ、何故疑ったのか」とのこの一言でありました。そして、そこで、弟子たちは主イエスのことを正しく知ったのです。

このことはつまり、「本当に、あなたは神の子です」との告白は、イエス様の偉さ、すごさへの驚きだけが言い表されているのではなく、自らの弱さ、愚かさといった、自分でも受け入れがたいこの自分自身の本性を知った上で、なお、主は見捨てはしないというこの経験、このことが弟子たちをしてそう言わしめたということです。そして、このことはまた、前の段落とのつながりの中で生じた驚きであることから、この一連のイエス様との出来事が、弟子たちをしてそう告白させたということです。それゆえ、私たちに求められていることが何かと言えば、この経験の積み上げ、積み重ねということです。主イエスがペトロに向かって、信仰薄い者よと語るのそれはそれゆえのことであり、ですから、薄い薄いイエス様を神の子であると信じるこの経験が積み重なって、私たちの信仰は形作られていく

ということです。では、このことは具体的にどういうことなのか。

一つには先ず答えを急ぎすぎないということです。答えを急ぎ、言葉の上で、「本当に」、「絶対」といくら口にしたところで、主イエスの十字架を、弟子たちは避けることはできませんでした。そういう意味で、「あなたは神の子です」との告白は、私たちの信仰を現すと同時に、その罪深さをも表しているとも言えるのです。けれども、その私たちに主イエスは「あなたは神の子です」との告白をお許しになるのです。つまり、私たちには耐えがたいこのギャップに身を置くところで与えられるものが私たちの信仰であり、つまりは、割り切ることのできるのではなく、割り切れないところに身を置いてこそ、私たちの信仰は形あるものとされるということです。またそうであるからこそ、急ぎすぎてはならないのです。それは、この割り切れなさの中にある主イエスの御心に聴こうとするところで、私たちの薄い薄い信仰は、積み重なり、厚くされ、その形を整えて行くことになるからです。ですから、それは、次のように言うこともできるのでしょうか。

それは、主イエスに赦された経験の積み重ねです。赦されることのない私たちが共にいます主によって赦される、そして、それは、同時に、自分自身を知ることでもありますが、その自分が一番割り切ることのできないものでもあるのです。また、そもそものところで言えば、人間とは割り切ることのできるものではありません。神様が造られた以上、それ以上でもそれ以下でもないからです。そして、さらに言えば、人間だけでなく、あらゆる命が初めから割り切れるものとしては造られていないのです。それゆえ、神様が創られたこの世界も人間が割り切って自分の思い通りにしていいということではありません。ただ、その割り切れないもの同士が共存し続けることは簡単なことではありません。そのため、私たち人間はどうしても物事を割り切って捉えようとするのですが、特に、慢心した

とき、心細くなったとき、さらには深く絶望したとき、割り切れない思いを抱えた私たちは、割り切ることによって自分が少しでも楽になることを考えるのです。そして、罪とはそのようなときに顔を覗かせるものなのですが、けれども、この割り切れなさの中に主イエスは私たちと、さらには、様々なものと共にいてくださっているのです。何でこんな事をしなければいけないのか、何でこんな思いをしないといけないのか、そう思う弟子たちと主イエスは共ににいまし、なお、その先への道筋を示してくださいました。

このように、最後の最後までを割り切らずにすべての者と関わり続けてくださっているのが私たちのイエス様であり、このことはつまり、赦されることがないと思い込み、その自分自身を赦すことのできない私たちのことを、神様とイエス様は赦してくださいっているということです。イエス様が「本当に、あなたは神の子です」とそのイエス様のことをそう告白することを私たちに何度も何度もお許しになるのはそのためです。そして、それは、その私たちを新しい明日へと導くためでもあります。それが「あなたは神の子です」とのこの告白の中で約束されていることなのです。だから、私たちは主イエスに向かって「あなたは神の子です」と堂々と告白するのです。そして、それは、私たちが達観し、割り切ってこの世を見つめているからではありません。割り切ることには私たちの心を楽にするのかもしれませんが、割り切れることのできないものの中に私たちが主を見つめ、このお方と共に示された道を歩み続けるから、私たちの薄い信仰は厚くされ、それゆえ、私たちの歩みは主イエスへの信仰ゆえに確かで強いものとされるのです。こうして、私たちの命はより豊かなものとされ、私たちは、「あなたは神の子です」とのこの信仰告白ゆえに、祝福された命を全うすることになるのです。祈ります。